

## 『ブルースドライブモンスター』 - 雨鼠

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

生まれないのだった。

その看板はもはや原形をとどめないほどひん曲がっていた。だから止められないのだ。

それでもやっぱり気が狂いそうだった。涙をボロボロとこぼした。つんざかれるかと思う程胸が痛んだ。だから僕はそれを振り上げて、そしてガンガンと叩き続けた。何度も何度も。

俺は走っていた。デコボコになったアスファルトの上を、盗んだマウンテンバイクを駆使してひた走っていた。

その怪物について、みんないい加減なことを言った。ある人は人間の犯してきた罪があのような災厄を生んだのだと嘆いたし、またある人は遂に世界が終わる時が訪れたのだと言った。宇宙からの侵略者だという声も聞こえたとし、どこかの国が開発した兵器だと言う者もいた。

全て間違っている。俺には分かっていた。

全部お前らが悪いんだ。

誰が何と言おうと、漫画のような痛快な音を立てて街は破壊されていく。重々しい地響きなんて聞こえない。あっけなく、気持ちいいほどだ。空虚な大人たちの顔が驚愕と絶望の色に変わる。逃げまどい、そして怪物の巨大な足に踏みつぶされ、薄っぺらな紙のようになって風に吹かれて消えていく。いったいどこに行ってしまうのだろう。いずれにせよ、幸せなところに行く終わり方ではないと思った。

塔のようなシルエットの怪物は、一つ廃墟を築き上げるたびに、悲しげなしわがれた声で鳴いた。その声は、どうしようもなく俺を締め付けた。

俺にはその怪物のことが全て分かった。ヤツがどこから来て、どこに向かっているのか、本当の目的は何なのか。怪物を追いかけるのに必死で、整理することは難しいが、体では理解している。今は言葉なんか要らない。大切なのは、距離を離さないように怪物をマークしておくことだ。ヤツが踏みつぶした跡をしっかりと辿っていくことだ。

そのモンスターとの距離は着実に縮まっていた。どうやら警官隊だか自衛隊だかによる攻撃を受けているようだ。おぼろげだが、閃光のようなものが確認できる。

「バカバカしい」

そんなものは通用しないのだ。正体も何も知らないくせに。おもちゃを振り回している子供の方がまだ害がない。俺にはちゃんと分かっているのだ。

その「止まれ」の標識を見つけた時、俺は勝機を掴んだ興奮に打ち震えた。怪物にへし折られたのか、半分ほどの長さになっていたそれを手に持って構えてみると、自分の両腕に完全にフィットした。そしてこれを使えばあの化け物に確実に致命傷を与えられることが直感で理解できた。

その鈍器を右肩に担ぎ、長いこと怪物を追いかけてきたのだ。左手のハンドル操作だけで段差路を滑走する技術もかなりブラッシュアップされてきた。正直肩はとても痛い。しかし痛みを我慢してさらに負荷をかけることにより、人間の脳は快感物質を放出するようになるという。そう、まさにこれは快感なのだった。あの怪物をこの手で仕留める瞬間を想像し、アドレナリンが体中を駆けめぐるのを感じた。

その時右後方から生き残った人々の歓声が上がった。何かと自転車を止めて振り返ると、原付にまたがった女性が颯爽と俺の横を通り過ぎていった。一瞬かいま見えた真剣な眼差しに闘志を感じた。そうか、彼女はあの怪物を倒す気だ。彼女は人々にとってのヒーローなのだ。

俺は彼女を追いかけた。「怪物は俺が仕留めるんだ！ いきなり現れたお姉さんなんかには負けないぞ！」とかいう思いは、ほんの少ししかなかった。純粹に、彼女がど

の程度の戦いができるのか、見てみたかったのだ。

案の定彼女はかなり苦戦を強いられていた。街を踏みつぶす巨大な足は、単に彼女を物理的に攻めるだけではない。生じる地響きは、俺の心臓の鼓動がかき乱されるほどだ。

しかしそれでも彼女は食い下がる。やはり無尽蔵に発砲する輩とは一味違った。怪物の周囲を滑走しながら、隙をうかがっている。俺は素直に関心した。

それでも、俺は心得ていた。彼女は怪物に傷一つつけることはできない。真の戦士たり得るのは俺なのだ。

その時、彼女が俺の方へ向かってるのが見えた。どうしたのかと考えていると、彼女はまだ破壊されていない巨大なビルに突っ込んだ。俺はにわかに驚いた。

怪物の両腕が高層ビルめがけて振り下ろされる。瓦礫が舞った。

そしてその時俺は彼女の作戦を悟った。彼女はこの瓦礫を踏み台にして俺を怪物の脳天にめがけて送り届けるつもりなのだ。その証拠にさあ行きなさいと彼女が微笑んでいるのが見える。ありがとうお姉さん。確かに彼女はヒーローだった。人々を救おうとするその姿も、自分を犠牲にして、俺を助けるその笑顔も、およそヒーローに相応しい。

しかし彼女は英雄であって主人公ではない。

自転車を放り出す。俺は瓦礫を足場に駆け上がる。足場は宙を舞う。早く登らなければ落ちる。簡単なことだった。瓦礫が一メートル落下する間に、こちらが二メートル登れば上に進める。崩れ落ちる瓦礫よりも速く俺は駆け上がった。もはや脳内麻薬とも呼ばれる快感物質は脳味噌からあふれ出していた。自分の体力の限界を超えているのはとうの昔に悟っていた。

ふと疑問が俺の脳裏を過ぎる。そこまでして倒さねばならぬ相手なのか？

しかしそれは俺が望んでいることなのだった。このモンスターに致命傷を負わせるために俺は走り続けてきたのだ。野放しにしておくわけにはいかないのだ。

眼前で落下していく瓦礫を右足が捉える。最後の跳躍。化け物の頭上。俺は躍り出た。手になじんだ「止まれ」の標識。今それを頭上高く掲げる。俺は落ちる。速度が上がり、風が体を切る。赤い逆三角形が接触する刹那気が付いた。

化け物の肩に、人がいる。

ズドン、という大きな轟音と共に、怪物の頭部はへし折られた。そして俺は地面へと落下していく。ゆっくりと、落ちていく。

「やった！」

俺は叫んだ。これで俺は死ぬ。疲労困憊した俺は、地面との衝突を回避する手だてを思いつかない。このまま行けば、全部おさらばできるはずだ。

「……どうかな」

聞こえてきた声は化け物の肩に乗っている人間から発せられたものだった。それは俺の声によく似ていた。

「君は何も分かっていないね」

彼は俺の今までの確信を完全に覆す矛盾を平気で口にした。

「肩に乗ってたいくせに」

彼は何を言っているのだろう。

「誰だ？」

落下しながら訪ねた。

「僕は君だ。つい昨日までの君だ」

それを聞いて少し気分が落ち着いてきた。

彼は俺だ。俺自身だ。

「僕、はこう思った。

全部お前らが悪いんだ。

僕をひとりぼっちにする、お前らが悪いんだ。

いい加減甘えを捨てなければと思った。自分がとても現実世界に生きていけないという強い強迫観念にとらわれてしまうと、周りの人間は全員敵だった。自分に対して何もしてくれはしない。やることなすこと全て悪あがきにしか感じない。これ以上

生きていてもしようがない。

敵ではない友人が、他人に迷惑のかかることはやめておけ、と言った。それならば、こうするしかないじゃないか。

「君は何度同じことを繰り返したんだろうね、去年もおととしもその前もその前も、だ」  
「僕、は呆れたようにつぶやく。

「いい加減諦めろよ。もうじき地面にたどり着くだろう。その瞬間、またあの下らない日常の幕開けだ。誰も君を救えない。君でさえ君自身を救えない」

彼のささやきは甘美だった。

それでも俺は――

「俺はあそこで生きていたいんだ」

と答えていた。

「ここにいた方が幸せさ。君はこの廃墟ですら愛せないと言うのかな」

「僕、の言葉に「俺、は眼下を見渡した。

「こいつは君が呼んだんだよ。全て君がやったんだよ」

「俺が……？」

地上には、怪物の通った跡がしっかりと刻まれていた。雲まで届くほどの砂埃が霞を作っていた。とても美しく、清々しかった。それはとても心地いい光景だった。

「肩に乗ってたいくせに」

彼は今度はニヤリと笑った。

「仕方ないじゃないか！」

俺は悲惨な着地の瞬間を思いながら叫んでいた。

「どうしてみんなあんな平気な顔してられるんだよ！ どうして人を裏切って平然と飯食ってられるんだよ！ この腐りきった世界ですら生きていたいと思ったら自分を律して律して……律するしかないんだろ！」

「……そうやって何度人を傷つけるんだよ」

ぐさりと来た。

「君のその投げやりな姿勢が君の敵とやらをどれほど深くえぐってきたか、分かっているのかい？」

彼は深い深いため息をついた。

「ここにいればいいんだよ。君を救えるのは、君しかいないんだから」

俺を救えるのは俺しかいない。

本当だろうか。

「君にしか壊せないんだ、この世界は。壊すことでしか君は生きられないんだ。だったら壊しながら生きていくといい。無理に自分を縛り付けない方が、きっといいよ。きっとね」

僕はやっぱり救われないのだろうか。

俺はやっぱり救われないのだろうか。

壊れていない世界では、救われることはないのだろうか。

眼前に、世界が迫っていた。

夜が明けた。

寝覚めは最悪で、それでも彼女は俺の気分が落ち着くのを待ってはくれない。どうして今日みたいな日に約束をしたのか。悔やんでももう遅い。

昔から街の中心地はあまり好きじゃなかった。楽しそうに談笑しながら歩いていく若者の顔などを見ると、こいつら全員地獄行きだと思う。下品な服を身にまとった人間を見ると、巨大な鎌を持った死神がそいつの魂をかつさらう凶を妄想してやり過ぎた。下卑た笑い声が聞こえる度に、俺の背後霊がそいつらの頭に右ストレートをぶちかました。路上にタバコの吸い殻を落としたり痰をはいたりしている人間はその場で勢いよく燃え上がった。

見回せばどいつもこいつも敵ばかりで、心の落ち着く暇もない。手をつないでいる彼女は、一ヶ月前俺の友人を抱いたらしい。肩間にしわを寄せていたら、面白くないの、と彼女は口を尖らせた。面白くねーよ。

それでもニコニコ笑ってられる俺は強いのだと思った。俺はかなり凄いヤツだ。目の前が敵ばかりでも平気でやっていける。何だか胸の奥が疼くがこれは気のせいだ。決まってる。

久しぶりに乗った電車の窓から見えた懐かしい景色は、俺を少しだけ懐かしく落ち着いた気持ちにさせた。敵が視界に存在しないことはそれだけで幸せなことだ。もちろん、扉の前で座り込んでいる愚か者などがいるが、どうせあいつらもろくな死に方をしない。どうやって死んでもらうのが最も妥当かをニヤニヤ考え、右手につり革、左手に彼女の手を握った。

タワーがあった。

窓の外の変わらない景色の中、それはくすんだ光を放っていた。

昔はよくタワーに登って街を見下ろした。

まだ俺が少年だった頃。嫌なことがある度に階段を必死で駆け上がった。エレベーターからすんなり登るのは、もちろん当時の俺にとっては邪道だった。

三十分前にした食事の約束なども忘れ、彼女に別れを告げて、次の駅で降りた。迷惑な若者を始末するのも忘れ、必死で走った。息を切らして立ち止まれば、目の前にタワーがそびえ立っていた。

五年ぶりに見上げたそれは、やはり怪物のように俺の目の前に立ちはだかっていた。あの頃のように階段で登った。あの頃と違うのは、高さを恐怖しなくなったことだ。俺は、強くなったのかもしれない。一步一步、感触を確かめるように。急いだ分の時間を取り戻すように。長い時間をかけて、展望台にたどり着いた。

そこは喧噪とは無縁のパラダイスだった。子供でさえも、大人たちから「はしゃぐと落ちるよ怖いよ」などと脅されて、おっかなびっくりだ。それほど迫力のある展望台なのだった。かつてはここで、世界を支配したかのような感覚に浸ったものだった。

嫌なこと。辛いこと。苦しいこと。それが癒えるために、どんなことがどれだけあっても、俺は真に救われたと感じたことがなかった。どんなに安らかな時を味わっても、次の瞬間にはまた別の困難が向かってきた。人間落ちるところまで落ちたら上がるしかない。それは本当のことかもしれないが、急激にピークまで上がれるかは疑問だ。対症療法で切り抜けつつ、底辺をはいつくばりながら、どうにかこうにかやってきたのだ、俺は。

ここは、そんな俺を空っぽにした場所だった。何も考えなくても、階段を歩いていればピークに達するのだから。

俺は嬉しくなって、展望台内を歩き回った。「立入禁止」の看板が立っている階段の上には何があるのだろうか。興味を引かれるところである。しかし、本当に登って怒られるのは嫌なので、興味を引かれたところで止めておいた。

調子に乗ってお金を入れて双眼鏡を覗いてもみた。代わり映えのしない景色ばかりだった。それに気づかされて、気分が悪くなった。

やはり変わらないのだ、何も。五年前の俺の姿と今の俺の姿は変わらない。考えていることも、何もできないことも。救われないことも。とてもとても気分が悪くなった。浮かれていた気分はふっとんでいった。

ガツン、と音が聞こえたのはその時だったと思う。

静かなざわめきを湛えていた展望台が、裁判官のハンマーによって静寂を与えられたように無音となった。

音のする方を振り返ると、一人の少年がいた。

あろうことか、少年は「立入禁止」の看板を振りかぶり、ガツンガツンと双眼鏡に叩きつけていた。

もはや金属が響く音しかしない。少年を中心にして、半径五メートルの綺麗な人の輪が形成されていた。しかし少年はそんなことお構いなしだ。一心不乱に双眼鏡を壊し続ける。

それは、まさに裁きなのだった。少年の、この腐敗した下らない世界に対する判決がこれなのであった。

「分かるよ」

僕は少年に声をかけた。僕の声を待っていたように、少年はピタリと振り上げた「立入禁止」を止めた。

「分かるよ」

俺は繰り返した。大根役者じみた演技だと自分でも思う。その仕草だけは少しでも真剣に耳を傾ける心理屋(ヒーロー)のそれに似ている気がした。

少年は息を弾ませながら振り返り、俺を睨んだ。髪は汗と涙でべったりと顔に張り付いていた。

それは間違いなく、俺だった。友人に裏切られて何もかも嫌になり、展望台に登って双眼鏡を鉄パイプでズタズタにした、かつての俺だった。

「止められないさ、誰にも。お前のことを止められる人間なんかこの腐りきった世界には一人としていない」

俺は優しく語りかけた。その時の俺が、性懲りもなくやっぱり望んでいたように。「全てを壊すお前を止められない奴らは軟弱だと思うかい？」

俺は言いながら野次馬を決め込んでいる周囲の人間を見回す。怯えているヤツ。ことの成り行きに興味津々なヤツ。俺をすぎるような目で見つめるヤツ。しかし、誰もこの非常事態に踏み込もうとは考えないのだった。当然だ。真に彼らはこの事態に対して無力なのだから。

「お前は強い」

俺の言葉に少年は無言でニタリと笑った。

「それは間違いだ」

俺は突き放した。

そう、それは間違いなのだ。

人のケツを拭いて回る人間はいない。俺はそれを「人は何もしてくれない」と感じる。みんな敵だと思ひこむ。俺だけひとりぼっちだと悶え苦しむ。

けれど、それはその「敵」に能力がないからに他ならない。人は他人の心の中の怪物を打ちのめすほどの力を持っていない。当たり前だ。その力を持っているのは、自分しかない。そのことに、気づかないふりをして、他人に甘え、世界に甘え、傷ついてまた苦しむ。文字通り救いようのないバカだった。

五年前の俺の姿と今の俺の姿は変わらない。考えていることも、何もできないことも。救われないうちも。それでも、気づいたことは、ある。

「止めてほしいんだろ？」

後ずさる少年に、一歩近づきながら俺はつぶやいた。

「止めてやったぞ」

少年の手からボロボロになった看板をそっと奪い取った。

「自分で止めるしかないんだ」

俺は言い放つ。ゆっくりと「立入禁止」の看板を振りかぶる。手に力を込めると、ささくれ立った柄が食い込んだ。左足を踏み込む。ほんの少しだけ時間が止まる感覚。

少年は笑っていた。

「できないくせに」

少年は言った。

フルスイング。

少年は横殴りに吹き飛んだ。窓ガラスに頭からめり込み、そのまま突き破って外に放り出された。体を切る冷たい風が吹き込んできた。

宙に放り出された少年はやはり笑っていた。落下しながら微笑んでいた。一筋だけ伸びた陽光が少年を包んだ。

雲間から差し込む太陽の光がぐさりと地面に突き刺さっていて、それはやはり間違いなく夜明けなのだった。少年は死んだ。かつての俺はいなくなった。どんなに後悔しても、消え去ってしまった。もう戻れない——はずだった。

そこはタワーの展望台のベンチで、目の前には彼女がいた。俺は頬を叩かれた。彼女は結局俺の元に戻ってきた。

戻ってきてしまった。  
何も変わらなかった。  
僕は自分の賭に負けた。

「バカだな、お前」

少年は俺に向かってそう言った。

俺たちは揃って怪物の肩に乗っていた。相変わらず巨大な足で味気ない世界を次々と踏みつづす。振動が逐一俺の脳に与えている感覚は、やはり快感以外の何物でもなくて、俺は頭を抱えた。

「できないんだよ、どう頑張ってもそんなこと」

少年は俺に、冷やかにそんなことを言う。

「くそ……」

望んでいるのだった。敵は俺を救ってくれない。そのことをいかに痛烈に実感しようとも、「ひよっとしたら」と考えてしまう。ひよっとしたら、この怪物を止めてくれるんじゃないか。誰か俺のことを救ってくれるんじゃないか。いっそみんな俺のことを見捨ててくれればいい。そうすれば随分と楽に生きられるだろう。けれど、ダメなのだ。「どうしたの?」「大丈夫?」そんな言葉に可能性を感じてしまう。壁を破ってくれるんじゃないかと期待してしまうのだ。

俺は結局、こいつに「止まれ」を突きつけることはできなかった。それは、誰が強いからでも弱いからでもない。自分が生きていくために作り出した救世主(モンスター)を止めることは、自分で自分の首を絞めることだ。

「バカだよ」

ゝ俺、はつぶやいた。

「そう悲観するな、バカ」

ゝ僕、はニヤニヤ笑いながらそう慰めた。

助けてくれ! という言葉がいかに無意味かは知っている。誰も本当の意味で真剣には耳を貸さないからだ。でも叫ばずにはいられない。助けを求めていることは事実だからだ。声に出さないと発狂して死んでしまいそうだからだ。みんな一体どうしてあんなに平然としていられるのだろう。俺にも僕にも、たぶんそれは永遠に分からない。

タワーの脇の交差点。進もうとする者をとどめ続ける見慣れた標識を、今日も俺は思い切り蹴飛ばして、そしていつもの夢を見る。

世界を壊す能力を持ったモンスターの大きな肩にまたがってどこまでも走っていく夢を。怪物を倒す者が、いつの日か現れてくれないか——そんな、途方もない夢を。

[戻る](#)